

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（二三）

蘭 部 寿 樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（一三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』二（明治書院、二〇〇四年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳（一）～（二二） 応永二三年～二九年（一四一六～一二）『米沢史学』三〇～三六号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇～五六号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二～四八号（二〇一四～二〇二二年）

○現代語訳（二二） 応永三〇年（一四二三） 一月一日から四月二九日

『米沢史学』三七号（二〇二二年）

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永三〇年五月一日から八月三〇日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からの「示教・ご叱正を切に望む」。

【主要参考文献】

- 横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）
- 位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）
- 小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七・別冊（明治書院、二〇〇二～二〇一四・二〇二二年）
- 村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記法寸考―」（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）
- 同「『看聞日記』の舞楽記事を読む」（『文学部論叢』一三八号、二〇一五年）
- 同「『看聞日記』人名考証三題」（『日本歴史』八八二号、二〇二二年）
- 松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）
- 植田真平・大澤泉「伏見宮貞成親王の周辺―『看聞日記』人名比定の再検討―」（『書陵部紀要』六六号、二〇一四年）
- 植田真平「伏見の侍―『看聞日記』人名小考―」（『書陵部紀要』七〇号、二〇一九年）
- 田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）
- 松蘭斉『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、二〇一八年）

五月一日、晴。「めでたい兆しがあり、とても幸せだ」と予祝した。

二日、晴。等持寺法華八講が始められたそう。

三日、晴。薬玉を宮家の女性たちがいつものように用意している。

足利義持・義量に薬玉を渡す

四日、晴。薬玉を室町殿と足利義量將軍に差し上げた。田向前参議がその使者として京都へ向かった。このところ広橋兼宣は病気で出仕していないようだ。それで裏松義資中納言に書状を出し、室町殿に薬玉を進上するように申し入れた。

取り次ぎ役の裏松義資は痔を患い、早退していた

夕方、田向前参議が帰ってきた。裏松は等持寺法華八講に出仕しているというので、等持寺へ行った。ところがこのところ痔を患っていて早退したそうで、取り次ぎはできないという。広橋宣光藏人頭兼弁官に頼んだら辞退されてしまった。

八方塞がりですべて困っていたところ、上皇様から室町殿にお渡しする薬玉を晦阿が取り次ぐというので、ついでに取り次いでもらった。すぐに受け取ってもらえて、室町殿にご覧いただいた。「毎年変わらず薬玉をいただき、ありがとうございます」とのお返事だった。將軍からのお返事は、いつものように將軍御所の女房からいただいた(※)。

※「女房からいただいた」：原文では「女房奉書」とあるが、これは「女房、これを奉ず」の誤記または誤読であろう。

五日、晴。「端午のめでたいお日柄で、とても幸せだ」と予祝した。風呂に入った。その後、いつものように御節供のお祝いをした。お祝いは田向前参議らが参列した。

七日、晴。豊原郷秋が来たので、音楽会をした。桃李花二帖・喜春楽破・河南浦・海青楽・平蛮楽・鳥急などを演奏した。長資朝臣が太鼓を打った。

蔭藏主松崖は天龍寺から離れたい所存

さてまた蔭藏主松崖が来た。しばらく休暇を取ったそう。天龍寺が嫌になって、寺から離れたらしい。去年よりその気持ちが生じて、何度も休暇をとっては宮家に来ている。もったいないことであり、よろしくない。しばらく大光明寺に滞在されるそう。

琵琶法師の常愛座頭

八日、雨が降った。琵琶法師の常愛座頭が来て、平家物語を語った。田向前参議以下、行豊朝臣・寿藏主らも平曲を聞いた。そして酒を飲んだ。大風で民家が吹き破られる

九日、雨が降り、大風が吹いた。この大風で民家が吹き破られた。今夜は朝廷で内侍所御神楽がある。

称光天皇の病気が再発する

称光天皇陛下のご病気が少し再発したらしい。それで、諸門跡寺院に祈禱をするよう、お命じになったそう。

蔭藏主松崖、大光明寺へ移る

十日、晴。松崖は大光明寺へお移りになった。

二十日、雨が降った。連日の長雨でひどい状況だ。大光明寺へ行った。

田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊ら朝臣を連れて行った。

大椿長老の金剛経談義

長老の大椿和尚による金剛経の講義を去年から希望していたが、いろいろあつて延期になっていた。それが今日、開講なさるといので、講義会場の塔頭大通院へ行った。聴衆の僧たちが大勢着席していた。私は御簾の中で聴講した。屏風を立てて、その傍らで惣得庵主も聴講なさっていた。

講義はすばらしかった。まず金剛経の前半まで講義なさった。長老

にご挨拶をしてから、席を立ち宮家へ帰った。

浄金剛院椎野寺主、蒙氣により宮家に滞在する

椎野が来た。最近、浄金剛院の寺領敷地が混乱する事態が起こり、気分が落ち込んだようだ。それで、しばらく宮家に滞在して、気分転換したいという。寺主なのに寺をしょっちゅう留守にするのはもったいないことであろう。

大椿長老の金剛經・般若心經談義

二十二日、晴。大光明寺に行った。田向前参議以下も行った。先日のように金剛經の講義が終わった。次に般若心經について講義なさった。すばらしい講義で、とても感動した。他の聴衆も同様の様子だった。

長老とお会いして、しばらくしてから帰った。その後、少し酒を飲んだ。二十五日、晴。毎月恒例の連歌会を西大路隆富朝臣が用意してくれた。

ただ当番幹事の隆富朝臣本人は欠席だった。会衆は椎野・田向前参議・重有・長資朝臣・冷泉正永・即成院善基・行光・小川禅啓らである。いつものように一献の酒宴をした。夕方までに百韻を詠み終わった。

二十六日、雨が降った。風呂に入った。

長雨で洪水となる

二十七日、雨が降った。このところの長雨で洪水となった。

連歌で勝負をする

朝早く御香宮へお参りした。その後、急に連歌会が行われた。左右の組に分かれて勝負することとなった。左方は私・重有朝臣・長資朝臣・善基で、右方は椎野・田向前参議・正永・行光らである。賞品は各々が持参した。判定の得点が来た時に勝った方が賞品を取ることに決めた。夜になって百韻が終わった。

二十八日、晴。朝早く、正永が帰っていった。洪水なので、宇治川の辺

りに出て様子を見た。夕方に生島明盛が来た。

今出川家の琵琶関係文書

冷泉永基朝臣が使者として連絡しに来た。勾当内侍東坊城茂子殿の手紙が来たので、その内容を宮家へ連絡しに来たという。今出川家の琵琶に関する書類は東坊城家に預けてあるようだ。ところが故今出川公行前左大臣に貸してあった琵琶の重要な楽譜などがいまだ宮家に返却されていないので、私は綾小路信俊を通して何度も今出川家に督促していた。

しかし東坊城家が書類箱を手許に抑えて一向に今出川家へ返そうとしない。それで今出川公行の未亡人である陽明禅尼が綾小路前参議を通して東坊城家に抗議していたようだ。そのことに関して、東坊城勾当内侍からいろいろと話が出ているという。

それで、宮家が預けていた琵琶関係書類の目録をまとめて冷泉に送るので、それに従って書類を選び出して返却してほしいと返事をしておいた。東坊城家が書類箱を抑えて返さないのは全くいわれのないことだ。この事を詳しく記すのは控えたい。

二十九日、晴れたり曇ったり、落ち着かない天気である。明盛が帰っていった。永基朝臣への返事、私が詳しい内容の書状を書いて送った。それを東坊城茂子勾当内侍へ伝えてくれるよう命じておいた。

六月一日、雨が時々降った。午前七時から午前九時まで日蝕だというが、晴れたり曇ったりしていたので日蝕を見ることができなかった。いつものように月始めのお祝いをした。その後、御香宮や愛染明王堂にお参りした。重有・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。

輿に乗って宮家へ帰る

愛染明王堂でお祈りをしている最中、急に大雨が降ってきた。しか

し暫くしたら晴れてきた。少し止んできたので、指月庵へ行った。そこで私の輿を呼び寄せて、輿に乗って帰った。

朝廷・上皇御所の小番が編成替えされる

二日、晴。聞くところによると、朝廷と上皇御所の小番が一回りしたので、新しく当番を編成したそう。それで長資朝臣は朝廷の八番、行豊朝臣は上皇御所の二番に編成されたという。

四条隆盛朝臣はこの二三年、天皇陛下からお叱りを受けていて出仕停止だった。しかし今回、お許しが出て番衆に加えられたそう。

宮家御所へ鳥が飛び入ったのは病の凶兆

四日、晴。午前十一時、鳥が常の御所に飛んできたそう。私は持仏堂にいたので、鳥は見なかった。廊御方が目撃したそう。

この吉凶を御香宮の巫女に尋ねたところ、たいした事はないそう。ただ病と関係があるという。目撃した人は謹慎した方がよいと占って来た。驚いたことである。

琵琶法師の城竹検校

五日、晴。琵琶法師の城竹検校が来た。去年の冬、父の御仏事の際、塔頭大通院ではじめて城竹の平家語りを聞いた。そのお札に宮家へ参りたいと頻りに城竹が言っているそうで、用健が呼んできた。祇園精舎から仏御前まで六句語った。すばらしい声である。すでに寺社寄付のための会でも平曲を語ったそう。感激の涙が流れた。聴衆も大勢詰めた。

下野良有が名田安堵の礼として酒を進上する

下野良有が一献の酒を進上してきた。これは名田の保証をいただいたお礼のお酒だという。酒宴には田向前参議以下が参加した。城竹には扇とお茶十袋を与えた。

綾小路信俊、脚氣を再発する

【頭書】（「日記の上方の隙間に書き加えた記事」）聞くところによると綾小路信俊前参議は昨日から脚氣を再発して、ひどい状態だそう。かわいそうなことである。

六日、晴れていたが、昼にわか雨が降り、雷が鳴った。城竹が土倉の宝泉のところへ押しかけたという。田向前参議以下が聞きに行った。平家語りが終わって、連歌会も行われた。城竹は連歌の腕前も申し分ないそう。連歌百韻が終わってから、また平曲を語らせた。深夜に及ぶまで賑やかだったようだ。

朝鮮から幕府に一切経などが献上される

七日、晴。今日の祇園会へ高麗の人々が見学に来たそう。先月、高麗からの進物、数万貫の銭と一切経などが幕府に渡された。宝幢寺で室町殿が高麗の人々とお会いになったそう。

【頭書】後に聞いたところでは、唐人は祇園会を見物しなかったそう。

八日、晴。来たる十三日は故今出川公行前左大臣の三回忌である。今日からお経を読むことにした。

大工の源内次郎が矢立や小船の玩具を作る

番匠の源内次郎に矢立を作らせていたが、それを今日持参して来た。私の息子のために、小さな船のおもちゃも作ってくれた。神妙なことである。

九日、晴。息子が源内次郎が作ってくれた小舟で遊んでいる。

小船順事

椎野が当番で酒宴を準備してくれた。小さな船に見立てた小振りの酒海（酒の甕）に、酒をなみなみと満たしてきた（※）。この酒宴に宮家の女性たち・重有・長資朝臣らが参加した。

※「酒をなみなみと満たしてきた」：原文では「蘸（ひた）す」とある。

小舟に見立てた小酒海の酒に、瓜などを浮かべたのであらう。

十日、晴。小舟酒宴を、当番の幹事として妻の二条が準備してくれた。

今出川公行三回忌に助成する

十一日、晴。故今出川公行前左大臣第三回忌の追善供養の法事のため、未亡人の陽明禅尼に錢二貫文とお茶十袋の助成をした。経済的に余裕がないので、心ばかりの品を送ったにすぎない。

ところで室町殿がご出家して以後、今日はじめて朝廷と上皇御所へ行かれたそうだ。上皇様は出家の引き出物として御馬・太刀・小袖十着を用意されたそうだ。室町殿の近習は皆揃って、行列の威儀を飾ったそうだ。

祐譽僧都が一献の酒を少し持参して来たので、その酒を飲んだ。

十二日、小舟の酒宴を重有朝臣が準備してくれた。さらには寿蔵主が小舟酒宴のことを聞きつけて、当番ではないのに酒宴を準備してくれた。思いがけなく酒宴が重なり、楽しかった。

十三日、晴。故今出川公行前左大臣十三回忌のため、ひたすら読経した。

椎野がお寺に帰った。

蔭蔵主松崖に韻府・天龍開山年府・普燈録を預ける

さて松崖が来て、中国風の絵六幅をお預け下さった。うれしかった。その代わりに、韻府二十冊・天龍開山年府三冊・普燈録一冊をお預けた。中国風の絵は使いどころがあるので、当面、宮家で預かることにしよう。我ながら、さもししい心掛けであるが。

竹田昌耆法眼の弟・医師の周防が綾小路信俊の脚氣を治療する

ところで綾小路信俊前参議の脚氣は重症で、治る見込みがないと連絡してきた。とても驚いた。竹田昌耆法眼の弟で医師の周防に治療さ

せているそうだ。

十四日、晴。ただし朝のうち小雨が降り、昼にはわか雨がいった。祇園会はなかなか見ものだそうだ。室町殿や義量將軍も見物したそう

だ。
小船の酒宴を宮家の女性たちが準備してくれた。その後、風呂に入った。

後で聞いたところによると、京都市内にはわか雨は降らなかったそうだ。それで祇園の祭礼も滞りなく進んだという。

十五日、晴。行光を使者として綾小路前参議の病氣見舞に行かせた。周防が良い薬を処方してくれたので、腫れが少しずつ治まってきた。それで、この分だと大事はないだろうとのことだった。めでたく、うれしいことだ。

足利義持がたいへん高価な唐絵を後小松上皇に贈る

十七日、小雨が降った。室町殿が上皇御所へ行ったそうだ。最近毎日のようにお越しになっている。先日、上皇御所御会所の泉殿に中国風の絵を飾った。これはたいへんな重宝だという。この二千貫文余りもする貴重品をすべて上皇様に差し上げたそうだ。ご出家されて以後のお礼の進物だという。

後小松上皇は召次の幸末佐を特に寵愛している

今日は、上皇御所下級職員である幸末佐が室町殿のために一献の酒宴を用意したそうだ。この幸末佐は上皇様が特別に寵愛している者で、他の者とは異なるお気に入りだという。

十一歳の岩が謹慎中の俊阿の代わりとして宮家に出勤する

二十一日、時々雨が降った。御所侍の子供で、十一歳の岩という小童が初めて御所に来た。岩は俊阿の養子だそうだ。岩は、謹慎中の俊阿の

代わりとして出仕するという。

二十二日、晴。松林庵の草花が盛りだということで、一覽しに行った。田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。花は見事なこと限りなかった。玄超が酒を用意してくれたので花見酒をした。しばらくして帰った。

二十四日、晴。明盛が来て、酒宴を準備してくれた。田向前参議らが酒宴に参加した。

二十五日、晴。毎月恒例の連歌会を、いつものように善基と禅啓の二人が当番幹事として準備してくれた。まず神酒と神饌を本尊の天神に供えた。その後、連歌会を始めた。午後七時頃に百韻を詠み終わった。早く終了したことは、二人の幹事として名誉なことであろう。会衆は田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣・正永・善基・正真・行光・明盛・禅啓らであった。

琵琶法師の城竹

二十九日、晴。琵琶法師の城竹が来た。この前来た時は、平家物語の祇園精舎などを語った。その続きを語りましょうという。それで今日、平家物語の第一巻分(※)を語り終わった。聴衆は芝殿や田向前参議以下、大勢だった。

※「平家物語の第一巻分」：平家物語の祇園精舎から内裏炎上まで。

近江国今西荘

三十日、晴。松崖が来た。近江国今西荘に関する詳しい話があった。いつものように風呂に入った。六月祓えの茅輪を田向経良前参議が用意してくれた。もともと茅輪を用意するのは綾小路信俊前参議の役である。しかし綾小路は病気で宮家に来られなかった。

聞くところによると、上皇御所御会所の泉殿の下に池の水を通すこと(※)を公卿や殿上人たちが準備したそうだった。

※「池の水を通すこと」：原文では「泉殿を蘸(ひた)すこと」とある。

七月一日、晴れていたが、昼にわか雨が降り雷が鳴った。「孟秋朔日めでたい兆しがある。すべての事においてとても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。

琵琶法師の城竹検校は、今月、北陸に下る

琵琶法師の城竹が来た。明雲座主流罪から小松内府教訓状までの六・七句を語ってくれた。聴衆は松崖・芝殿・田向前参議以下、行豊朝臣・寿藏主・正真らであった。平家語りの間、一献の酒を飲んだ。夕方になって城竹検校は帰っていった。城竹は今月、北陸(※)へ行くそうだった。さて七夕に詠む和歌の題を出した。その題を行豊朝臣が清書した。

※「北陸」：原文では「北国」とある。

絵を描く僧侶

五日、晴。退藏庵へ行き、納涼した。その後、蔵光庵へ行った。蔵光庵に絵を描く僧(※)がいて、屏風に絵を描いていた。この僧は大光明寺に住んでいて、長老のお弟子さんだという。しばらく絵を描く様子を見ていた。すばらしいものだった。田向前参議以下も一緒に見ていた。

※「絵を描く僧」：これは、応永三十年七月十九日条に出てくる頓書記のことであろう。

六日、晴。廊御方のお部屋で酒を飲んだ。これはちょっとした祝宴だった。

田向前参議以下、寿藏主も酒宴に参加した。

夕方、大光明寺へお参りに行った。明日は光厳上皇の御命日である。それで明日お参りするべきなのだが、明日は七夕で慌ただしいので、今日お参りした。読経の法会に参列した。田向前参議以下、行豊朝臣も参列した。

七夕の草花法楽

七日、晴。いつものように、朝早く梶の葉に和歌を書いて奉納した。七夕に奉納するための草花を集めた。寺庵主や宮家の男ども、それに村人たちから、花瓶が三十瓶集まった。花瓶を進上してきた者たちの目録は別

紙に記しておいた。座敷を飾る品物を土倉の宝泉が献上してきた。座敷を例年よりも華やかに飾った。僧侶や俗人たちが花を飾った座敷を見に来た。

まず風呂に入った。次にいつものように節供のお祝いをした。松崖・田向前参議・重有・長資・行豊朝臣・寿蔵主・具侍者・大光明寺の稚児である中薩らがお祝いに参列した。一献の酒宴が終わってから、七夕の和歌を披露した。その後、七つの雅楽曲を演奏した。長資朝臣が合奏してくれた。宮家に演奏者がいないのだが、特別に七夕へ奉納するために演奏したのである。

さて上皇御所での御花合わせは、例年よりも華やかだったそう。音楽も七曲、演奏者はいつもの面々だったそう。

山科教有と松木宗継の座席争い

ただ山科教有卿と松木宗継朝臣が座席の順番争いをしたため、二人とも御所から追い出されたそう。教有は三位（※）であるが、参議ではない。宗継朝臣は四位だが、参議である。それで座席の順番争いになった。先例を言い張ったが、朝廷の見解がはっきりしないので、とりあえず二人とも退出するように上皇様がお命じになったそう。

※「三位」：原文では「正階」とある。教有は正月五日に従三位に叙されたが非参議。宗継は正四位上で参議だが、正月五日に従三位に叙されている。従ってこの時点では二人とも従三位なので、かねてから従三位だが非参議であること（教有）と、後から従三位になったが参議であること（宗継）が実際の争点になったのであろう。

八日、晴。花を飾った座敷は、昨日のままにしておいた。毎月恒例の連歌会は祐誉僧都が当番の幹事である。会衆は田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・善基・行光・禅啓らである。一献の酒宴を祐誉が少し整えた。夜に入って百韻が終わった。

貞成、七夕後朝の別れを詠む

第一句を私が詠んだ。

夜や惜しき 袖続く 今朝の乏し嬢（※）

車を洗う 天の川浪

行豊朝臣

私は、七夕後朝きんぎょうあしたの別れの心を詠んだのである。

※「乏し嬢」（ともしづま）：乏し妻、すなわち逢うことが乏しい妻で、織り姫のこと。嬢は麗に通じる字で、意を取って妻と訓じたのであろう。なお、世尊寺行豊の第二句にある車とは牛車のこと。

十日、雨が降った。座敷の花を撤収した。飾り道具などを持ち主に返した。お盆のお経を読み始めた。

近江国今西荘、再び

十一日、雨が降り、風が吹いた。松崖が来た。また近江国今西荘のことで話が合った。この領地は祐誉僧都が事務取扱をしている。ところが松崖は祐誉ではなくて常徳院主に事務取扱を命じてほしいと何度も言ってきたのである。いずれにしても難しい話だ。

足利義持と鎌倉公方足利持氏の対立

ところで聞いた話では、室町殿と鎌倉公方との間で不快なことがあり、今では敵対状態になっているそう。それで斯波義淳勘解由小路左兵衛佐や一色義貫ら七人の大名（※）に出兵するよう命令が出たという。全国的な大乱が起きそうで、あれやこれや驚き入ることだ。

※「七人の大名」：原文では「大名七頭」とある。

諸大名は鎌倉府討伐軍派遣に否定的

十三日、晴。鎌倉府に討伐軍を派遣する件を、諸大名が室町殿の御所へ集まって評定をしているそう。諸大名一同は討伐は困難だと反対しているので、軍勢の派遣は未定となっているらしい。ところで徳祥和尚が今日、亡くなったそう。

光台寺のお茶接待

十四日、晴。いつものようにお盆の用意をした。光台寺門前では御茶屋の座敷を飾りお茶の接待を始めた。それに大勢の人が群れ集まっているようだ。

いつものように石井村・船津・山村の念仏囃子物の行列が来た。

お盆で蓮飯のお供えをする

十五日、晴。いつものように蓮飯でお盆のお供えをした。田向前参議以下行豊朝臣もお供えに参列した。その後、大光明寺へ行き、仏殿に焼香した。次に塔頭大通院へ行き、院主の用健と雑談した。干し飯や冷たい水を勧めてくれた。

施餓鬼が始まったので、参列席についた。宮家の女性たちも同じく参列した。田向前参議・重有・長資・行豊朝臣・慶寿丸らも参列した。施餓鬼を勤行する僧衆は四十人余りだった。施餓鬼が終わって宮家に帰った。

夜に光台寺のお茶接待をお忍びで見物しに行った。息子や田向前参議らも連れて行った。御茶屋の座敷飾りや風流な灯籠など目の保養となり面白かった。庶民が大勢群れ集まってきたので、急いで帰った。

山村の念仏拍は高野聖や白楽天の漢詩を物真似した

その後、山村の念仏囃子が石井に来て、次に宮家御所へ来た。物真似芸の様子は、箆を背負った高野聖が十人余りいる姿であった。また作り物の紅葉の枝が提灯や灯籠に懸かっている様子もあった。この紅葉の枝は林間暖酒（※）という漢詩の心を表したものだそうだ。いろいろと変わった風情があり、面白かった。

石井村の地侍集団は石引きの様子を物真似した

次に石井の物真似芸集団が山村へ行った。これは、石井村の地侍や田向家の侍どもの集団である。石井村の物真似は、石引きの様子を表したものであった。馬に乗った者が一人先行してきた。次に石が来た。石の上

には御幣を持った人形が乗っている。この石に縄を付け、大勢で引く様子を物真似していた。これも風情があつて面白かった。

舟津は朝比奈義秀や勧進僧の様子を物真似した

次に舟津の物真似。これは、朝比奈義秀（※）が門を打ち破る様子を表したものであった。まず門が作つてあった。それに朝比奈が鎧や七つ道具を身につけて馬に乗ってきた。これには二人の騎馬武者が従っている。この他にまた、寄付を求める勧進僧が十人ばかり、各々柄杓を持っており、灯籠に紙を貼って作つた鐘も置いてあった。いろいろな物真似芸があつて、すごく興味深かった。

相国寺垠西堂が施餓鬼の最中に倒れる

ところで聞いたところによると、昨日、鹿苑院で施餓鬼の最中に、室町殿の参列席前で突然、垠西堂が倒れ込んで意識を失ったそうだ。僧たちがびっくりして急いで担ぎ出した。その後、すぐに意識を取り戻したそうだ。それで今朝、垠西堂は相国寺から引退なさったという。中風らしい。しかしそれとは別に、倒れるような病気ではないかという噂も流れているそうだ。

垠西堂は近く建仁寺長老に登用される予定であつたらしい。しかし長老になれない前世からの因縁があつたようで、しかたないことであろう。今となつては臨済宗僧侶として交際していくのは難しく、垠西堂の生涯はこれで窮まったといえよう。

近江国今西荘の件で垠西堂と話が進んでいた

このところ近江国今西荘のことで垠西堂から話を聞いていたので、特にかわいそうである。取り次いでいた松崖も御力落としのことであろう。

※「林間暖酒」：白楽天の林間暖酒焼紅葉という漢詩の一節で、林の中で紅葉を焼いて酒を温めるといふ意味である。

※朝比奈義秀（あさひなよしひで）：鎌倉初期の怪力の武将。建暦三年

（一二二三）の和田合戦で和田一族として將軍御所の総門を打ち破るなどの奮戦をしたと伝えられている。

十六日、雨が降った。即成院の念仏会に参列した。宮家の女性たちや男どもも、いつものように参列した。

伏見宮家が念仏所一反を即成院に寄進した

まず住職のお部屋で一献の酒宴があった。伏見荘の土地一反を念仏料所として即成院に寄進した。これは宝泉が手配したものである。このお祝いやお礼として、宮家に一献の酒を献上したということだ。

椎野がまた宮家に来た。宮家で病気の養生をするといっている。

十八日、晴。惣得庵主と明元らが来た。酒樽一つを持参して来たので、それで酒を飲んだ。

十九日、晴。夏の修行期間なので、蘇合四帖を弾くなど、音楽の練習をした。それも今日が最終日である。

頼書記が梅の大木を御所の障子に描く

昼に塔頭大通院へ行った。御所の間障子の絵を長老の弟子である頼書記が描いているというので、一目見に行ったのである。大木の梅の木が障子四間に描き渡してある。その勢いはすばらしいものだった。

上皇御所舞御覧

さて今日、上皇御所で舞御覧がある。殿上人の演奏家で年老いた者は今回の演奏から除いたそうだ。若い演奏家だけが呼ばれたという。ただし演奏を希望する者はほぼ全員参加したそうだ。舞楽の出席者名簿を見たので、ここに記しておく。

入場曲 万秋楽破

左右

万歳楽・地久・賀殿・長保楽・秘曲の蘇合・新鳥蘇・散手・貴徳・青海波・胡徳楽・太平楽・狛杵・河南浦・甘州・綾切（この一曲だけはその場で演奏中止となった）・拔頭・八仙・陵王・納曾利。陵王の舞

人へのご褒美は正親町三条公雅大納言が渡した。落蹲の舞人へのご褒美は洞院満季大納言と久我清通大納言が渡した。

退場曲 長慶子

演奏者

笙

山科教有三位（当日急に不参加）・松木宗継朝臣・山科教豊朝臣・四条隆盛朝臣・豊原藤秋・同氏秋（鞆鼓）・同為秋（三鼓）・同家秋・同幸秋（太鼓）・同郷秋・同敦秋・同村秋・同遠秋・同久秋（鉦鼓）・同高秋・同継秋・同興秋・同光秋・同重秋

箏

安倍季永・同季久・橘秀重

笛

洞院満季大納言・徳大寺実盛大納言・中山定親参議兼近衛中将・山井景房・同景親・同景清・同景勝・同景藤・同景興

琵琶

園基秀前中納言・同基世朝臣・藤原孝長朝臣

箏

後小松上皇（御筈にも時々交わる）・正親町実秀権大納言・四辻季保

朝臣・同季俊朝臣

舞人 左

伯正葛・同英葛・同忠葛・同藤葛・同季葛・同葛衡・同則宗

右

多忠興・同忠信・同忠国・大神晴方・同行枝

判定者席

正親町三条公雅大納言・久我清通大納言

鴨の胸が反る秘説

舞御覧は新築の御会所泉殿の前に向かって行われた。池の前を経て一

曲演奏するとき、鴨の胸が反る秘説(※)が行われたそう。演奏者は直衣に衣冠や布衣の者が入り交じっていたという。上皇様御座の間の御簾が巻き上げられると、室町殿が直綴を着てお側に仕えていたそう。

山科教有卿と松本宗継朝臣はこの前の七夕音楽会の際、座席争いをした。それで教有は先例を引き合いに出してお願いをしたが、上皇様のご機嫌は斜めで、よろしくないと言った、それで今回、教有は不参加であった。宗継朝臣は参加したそう。

※「鴨の胸が反る秘説」…未詳。鴨が胸を反らすような舞人の所作か。

大洪水

二十二日、大雨が降った。最近、長雨である。それでひどく大水が出たそう。田が荒れ果てて、人民は慌てているようだ。

洪水の眺望は湖水のようでも面白かった

二十三日、洪水を一目見に行った。田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣・慶寿丸・梵祐を連れて行った。東舟津・西舟津を見た。御所の馬場まで水が満ちあふれていた。湖水のような眺望である。とても面白かった。しばらくして帰った。

法安寺の住職が馬一頭を見せに来た。山名方から預かっている馬だそう。行豊朝臣が試乗してみた。名馬と言わなければならない。その後、蹴鞠をしたが、人数が少なかったのでつまらなかった。

関東では合戦が始まっているとの伝聞

聞くところによると、関東では既に合戦となっているそう。

二十四日、晴。郷秋が来たので、音楽会をした。太食調の打毬楽・道行・太平楽破・太平楽急・傾盃楽急・輪鼓禪脱・抜頭を演奏した。長資朝臣が太鼓を打った。

音楽会が終わって、郷秋は石清水八幡宮へ行くと言って、急いで出ていった。室町殿が二十日から石清水八幡宮にお籠もりしており、明日には舞楽があるそう。

松崖が来た。近江国今西荘について常楽院から申し出があったそう。

田向家灯籠供養で相撲が開催される

今夜は田向家で灯籠供養があった。その一環として相撲があり、村人たちが集まってきたそう。

琵琶細工人の卓阿

二十六日、晴。重有朝臣が八朔贈答のことで京都に出ていった。ところで、琵琶細工人の卓阿という者が京の押小路と東洞院大路の交差点付近に住んでいるそう。重有朝臣に琵琶修理の為、卓阿の家を尋ねさせた。

二十七日、晴。いつものように風呂に入った。

二十八日、晴。いつものように御香宮へ月詣で行った。

玄忠が来た。禅光も来て、一献の酒宴を少し準備してくれたので、酒を飲んだ。松崖・田向前参議らも飲んだ。

さて先日の連歌会では、左右に分かれて勝負した。それで今日、賞品を分配した。もともと優れていた(※)椎野は賞品を二つ受け取った。優れた句(※)を詠んだ田向前参議が二つ、正永が一つ、行光が一つ賞品を受け取った。それ以外の品はそれぞれ鬘を引いて(※)、賞品を取った。

※「もつとも優れていた」…原文では「長」とある。

※「優れた句」…原文では「句勝ち」とある。

※「鬘を引いて」…原文では「引き合い」とある。

浄金剛院椎野寺主、痢病に苦しむ

二十九日、晴。明日の八朔贈答の用意にかりつきりで慌ただしかった。椎野が寺に帰った。椎野はこのところ下痢がひどかった。去年からいろいろと病に苦しんでおり、散々なありさまだ。今回、いささか体調が良くなったので、寺にお帰りになったのである。

八月一日、晴。「仲秋の朔日(※)で、すべての事がめでたい」と予祝した。

いつものように八朔の贈答をした。朝早く、大きな酒甕である酒海一つ、碁盤の地紋に薪・斧・碁笥を打ちつけた銚子提、それに引合紙三十帖を、いつものように冷泉永基朝臣を通して上皇様へお贈りした。

宮家外様である椎野・正親町三条家・勸修寺家・葉室家・今出川家の陽明禅尼らから贈答があった。いつものように田向前参議が一献の酒宴を用意した。また行豊朝臣から初めて八朔の献上品があった。

琵琶法師の米一座頭

用健・松崖がいらっしゃった。琵琶法師の米一座頭が来て、平家物語を一句語った。酒を飲んだ。

※「朔日」：原文では「告朔」（こうさく）とある。

二日、晴。廊御方がいつものように、二日憑みとして一献の酒宴を用意してくれた。

三日、雨が降った。相応院主弘助親王へ御憑の贈答品を進上した。すぐにお返しの商品をいただいた。祐譽僧都も同じく御憑の贈答品を献上してきた。相応院に近日、お弟子がお入りになるそう。それは南朝の皇族で福御所のお子さんだそう。

室町幕府戦勝祈願の春日大社で、大木が拝殿を破壊する重大な怪異が起こる

ところで鎌倉公方叛逆の件で、春日大社・興福寺・東大寺にご祈禱が命じられた。ところがご祈禱を始めようとしたら、春日大社社頭の大木が、風に吹かれてもいないのに倒れたそう。その大木は拝殿に倒れかかり、拝殿が壊れたという。まだ幕府には正式に報告はされていないらしい。とても重大な怪異であろう。

四日、晴。芳徳庵主が一献の酒を持参して来たので、酒を酌み交わした。

松崖・田向前参議以下、行豊朝臣らが酒宴に参加した。

芳徳庵主がお帰りになった後、双六の勝ち抜き戦（※）をした。賞品も出した。行豊朝臣が勝った。

※「勝ち抜き戦」：原文では「打ち勝ち」とある。

松崖、天龍寺聚景坊主となる

五日、朝に雨が降った。松崖が天龍寺へ帰った。松崖は同寺の聚景坊主となることを請け負ったという。経済的に苦しくて、去年より松崖は伏見に移住していた。しかし門流の老僧たちが松崖に意見を加えたので、天龍寺へお帰りになったのである。

近江国今西荘代官職

近江国今西荘代官である熊谷を解雇して、常徳院主が代官職を執行するよう、松崖と約束した経緯がある。それで田向前参議が常徳院に行き、詳しく相談してきた。

昨日の双六に負けたのが口惜しくて、男どもが再度、双六をすると言い出した。賞品はそれぞれが持ち寄った。私が勝って、賞品をすべて我が物にした。まったく鼻高々である。

琵琶法師の米一座頭、地神経を唱える

夜に琵琶法師の米一座頭を呼び出して、地神経（※）を唱えさせた。祈禱を兼ねた語りであった。檀紙十帖とお茶などを米一に与えた。

冷泉永基朝臣が八朔憑みの贈答品を、今日送ってきた。室町殿が一日より連日上皇御所へ参られていたので、忙しくてお贈りするが遅れてしまったそう。

※地神経（じしんきょう）：金光明最勝王経「堅牢地神品第十八」の略称。

琵琶法師は、地神を供養するため、琵琶を弾きながら地神経を唱えた。七日、晴。前典侍禅尼藤原能子殿が御憑みとして酒海と引合紙十帖を進上してきた。重宝なので、うれしかった。

世尊寺行豊、幕府軍旗の銘を書く

八日、雨が降った。鎌倉公方討伐の大將の出陣が決まったそう。行豊朝臣に幕府軍御旗の銘を書くように命令が下った。飯尾善左衛門尉が御使として行豊のところへ来た。旗二流に銘を書くように仰せがあったそう。とても厳重な命令のよう。

九日、雨が降った。行豊朝臣は幕府軍御旗の銘を書くために、京都へ出かけた。

十日、雨が降った。度の過ぎた長雨である。伏見荘の田地も洪水にやられて、散々な状況である。

仁科入道の急死

京都に出ていた重有朝臣が帰ってきて、世間話をしてくれた。仁科入道が一日に急死したそう。それまで病気にも罹っておらず、七月晦日に寝たまま、死んだそう。かわいそうなことである。父・大通院の時代、仁科には御領の代官としていろいろと世話になったので、古くからの誼がある。それだけに特にかわいそうに思った。

足利義持が後小松上皇に伏見宮家が近江国山前荘を支配すべきと論じる

ところで、去る四日に室町殿が上皇御所へ行つた際、この伏見宮家が経済的に苦しい状況であることを室町殿が上皇様にお話し下さったそう。それで近江国山前荘を伏見宮家へお返しになるよう、お取り下さった。山前荘を徳光院に寄付するのは問題があるとも言ってくださったようだ。まずこのように経済的に苦しい事情についてお取り上げくださったのは、うれしいことである。この詳しい事情は、冷泉永基朝臣が話してくれたそう。

陰陽師勘申の吉日に御旗の銘を書く

十一日、晴。幕府軍の御旗の銘を書くこと・その旗の守護を祈禱すること・この旗を大將軍に授けること、この三つの事をいつやったら良いか、陰陽師に占わせた。すると今日が吉日だと報告があったそう。

御旗の銘は南無八幡大菩薩

それで行豊朝臣は銘を書いた。銘を書く旗は二流れある。その銘は足利家の二引両の家紋の上に「南無八幡大菩薩」と書くものである。八幡の八の字は鳩が向かい合う姿に書くという。銘を書き終えると、すぐに旗を幕府に持参した。恩賞が下されようという室町殿の仰せがあったそ

うだ。行豊はすでに三回も御旗の銘を書いている。これまでの例だと必ず恩賞があったそう。

御旗下賜の儀式

御旗取り扱いの役人である一色某が来た。一色は直垂に大口袴を着ていた。直垂に籠手などの小具足を付けるのが先例であるが、今回は小具足を付けていなかった。一色は乗り替え用の馬二頭に、鎧入りの箱を背負った人夫を連れていた。御所で小具足を付けるらしい。室町殿は御旗一流を一色に下された。一色はその旗を受け取り、退出した。この受け取りの儀式には独特の作法があるらしい。そして討伐軍の大將軍である今川範政駿河守と桃井某の兩人に御旗をお授けになられたそう。

十二日、晴。今日はお彼岸の初日である。いつものように身を浄めた。

十三日、晴。風呂に入った。

十四日、雨が降った。石清水八幡宮放生会に出仕するため、長資朝臣は同宮へ向かった。行豊朝臣も長資朝臣に同道した。

十五日、晴。石清水八幡宮放生会はいつもの通りの進行だそう。御香宮へお参りした。

法安寺千手堂修理田

法安寺の住職が一献の酒を少し持参して来た。廊御方の部屋で酒を飲んだ。法安寺千手堂の修理費用を捻出する田について訴えてきた人がいた。しかし法安寺の主張に道理があるので、本来のように法安寺が支配することを認める命令書を同寺に与えた。そのお礼を言いに来たそう。

琵琶法師の元一座頭

満一検校の弟子で、琵琶法師の元一座頭が来て、平家物語を二、三句語った。まだ初心者である。

夕方に長資朝臣が石清水八幡宮から戻ってきた。放生会は無事終わったそう。執行責任者の公卿は正親町三条公雅大納言、参議役は中山定

親参議兼近衛中将、弁官は日野西秀光朝臣だそう。神人の訴え事があったが、室町殿が宥め仰せられたので、神輿の巡行は無事だった。

今夜はいつものように名月のお月見をした。和歌の題を出しておいたので、面々が歌を詠って寄こした。しかし披露には及ばなかった。残念である。

青蓮院義円が鞍馬寺で関東を調伏する

【頭書】今日、青蓮院主義円殿が鞍馬寺にお籠もりになって、鎌倉公方を呪う行法を行ったそう。

足利義持の斡旋で南朝方上野宮の子息が相応院の弟子になる

十六日、晴。相応院のお弟子さんが今日お寺へお入りになったそう。南朝方の上野宮のご子息だとか。室町殿のお計らいで、裏松義資中納言が万事取り次いでいるようだ。

即成院の念仏会に参列した。いつものように宮家の女性たちや男どもも参列した。小一献の酒宴があった。

田向家青侍の広時が持病の風気で病死する

十七日、晴。午前七時に田向家の侍である広時が死去した。一昨日、石清水八幡宮に参詣して、その帰路、持病の風気（※）を再発させた。今日の明け方には重態となり、命を落とした。とてもとても、かわいそうなことだ。言葉にならない。

広時は料理・包丁式・歌舞など多才な人

広時はいろいろな才能のある人で、重宝した。料理・包丁式・酒宴の座における歌舞、生まれつき多才な人であった。公私に付き、惜しくもあり、かわいそうであり、何とも言いようがない。主人である田向前参議もとてもがっかりしていることであろう。

女官目々は広時の養女

女官目々は、広時の養女なので、自宅に籠もっている。

※風気（ふうき）：一般的には風邪をさす言葉である。

十八日、雨が降った。お彼岸の最終日である。いつものように身を淨めた。二十日、晴れていたが、夜に大雨が降った。

関東の夜討ち合戦で京方が負ける

聞くところによると、関東で今月二日夜討ちの合戦があったそう。佐竹一族の山入与義・小栗満重・京方の桃井宣義が負けて、小栗と桃井は討死、山入は切腹したという。ただし落ち延びたという説もあり、はっきりしない。京方の軍勢は相当数が戦死した。このような内容の報告が幕府に届いたという。室町殿はとても驚いていらつしやるそう。

斯波義淳勘解由小路左兵衛佐は遠江国守護なので、斯波家家臣の甲斐将久と織田らが急いで現地向かった。一色義貫山城国守護の守護代三方範忠入道も現地に急行したそう（※）。日本全国の人々が驚嘆してらるだろう。

※「現地に急行したそう」：原文では「美作へハ」とあるが、誤記であろう。

二十二日、晴。椎野のお弟子になりたいと柳原宮がご希望だそう。それで内々にご承諾されたという。正親町三条家に八朔のお返しを送った。

九州にも反乱軍が現れる

二十三日、雨が降った。行豊朝臣が朝早く京都に出た。室町殿からお呼びがあったそう。これはまた御旗の銘を書かせるためらしい。九州でも御敵が出現したので、それを討伐する軍に御旗をお下しになられるそう。

関東の合戦についても、いろいろな噂が流れている。実際のところはどうか、全く不明である。

二十四日、晴。上皇様が来月十日に崇賢門院藤原仲子殿や室町殿らのところにいらつしやるそう。

それに対して室町殿は、裏松義資中納言を通して上皇様に意見を申されたという。「関東や筑紫でも兵乱が起こっています。北畠満雅伊勢国

司も南朝方の宮家を擁立して義兵を挙げたそうです。このような時分なので、ご来訪は延期なさった方がよろしいかと存じます。兵乱を鎮静化した際に、ご来訪の準備を致します」と室町殿は上皇様に申されたそうです。それで、ご来訪は延期になったという。

島田益直がおできの再発で死去する

ところで聞いたところによると、六条庁官の島田益直が今日、死去したそう。以前からおできで苦しんでいたという。少し快復していたが、再発して命を落としたそう。去年、六条院庁の役職に任命されて仕事をしていたが、その二年間がまるで夢のよう。古くから宮家に仕えており、現在も熱心に仕事をしていただだけに、とてもかわいそうに思う。

行豊朝臣が帰ってきた。御旗二流れの銘を書いたそう。そのうち一流は今川範政駿河守に下されたという。

小除目

今夜、朝廷で臨時の官職任命式があったそう。左大将に近衛房嗣、右大将に洞院満季、中納言に日野西盛光、参議に四辻季保らが任命された。臨時任命式の執行責任者の公卿は正親町実秀大納言、事務取扱は坊城俊国右少弁だという。

近衛大将兼任を巡り洞院満季と久我清通が争う

近衛大将をめぐることは、洞院と久我清通が争っていたところ、上位者である洞院が先に昇進したのはめでたいことである。久我のことを室町殿は推薦していたが、洞院は上皇様のご鼻屑だったので、このような結果になったようだ。

二十八日、晴。いつものように風呂に入った。蔵光庵が松茸を献上してきた。皆で松茸を味わいながら、酒を飲んだ。田向前参議以下、行豊朝臣・寿蔵主らが一緒だった。

室町殿は北野天満宮にお籠もりだという。上皇様のご来訪の件、上皇

様のお考えでは延期はしないということなので、なおご調整されるよううだ。

月見岡で松茸狩りをする

二十九日、晴。遊山に出かけた。田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣・慶寿丸を連れて行った。月見岡で松茸を捜した。田向前参議と行豊朝臣は二・三本採った。それを即成院に行つて味わった。即成院主に一献の酒を用意するよう、命じた。すでに日暮れになっていたので、二・三献だけで帰った。

貞成の娘を入江殿の弟子にする

ところで入江殿から私の娘をお弟子に取りたいとの申し出があった。むしろこちらから先にお願ひしたいところだ。それで、室町殿のご意向を伺ってくださいとのことだった。室町殿にお伺ひしたところ、問題はないということだったので、お弟子として迎え入れるとのことだ。めでたいことである。

三十日、晴。洞院満季が右大将を兼任した件で、田向前参議を使者として洞院へお祝いを申し入れた。勧修寺家や慈雲院らに八朔贈答のお返しを送った。

(続)